

WOC 2003

肌が焼けていくかと思うほどの日差しから、会場の中に駆け込んだ。スタジアム内への階段に向かうと、体を揺さぶるビートが開けたままのドアからあふれ出ている。中は暗くて下からは良く見えない。ビートに混じれて歓声が聞こ

今回最も多く発した言葉であったことは間違いない。異常な暑さで連日30度を軽く越し、ほとんどの日は35度前後だった。

暑い夏を想定していない開会式会場はエアコンなんてない。更にダンスのステージ仕掛けで火を使ったので、苦しくな

スタートの先の広場をそわそわと見渡している様子から、緊張感が伝わる。そして、その瞬間が突然のように訪れ、スプリントのトレインであるラッパーズビルの街中に大助はスタートを切っていった。

歓声が会場内を大きくこだまする中、

える。僕は席を確認した入場券を握り締め、階段を駆け上った。興奮していた。

入り口付近で人を掻き分ける。サウナの中のような空気。汗がべとべとしているが、かまわない。体をねじりこみようやくアリーナ内を見渡すと、スイスの赤い国旗で埋め尽くされていた。

スイス2003年世界選手権の開幕だった。

『熱い』

るほどだった。そして、第一の種目であるスプリントのスタートが近づくにつれ、観客のボルテージはあがっていった。

そのスタートからもう1,2分前。ようやく主催者、市長などの挨拶、世界選手権ソングの熱唱、ダンスが終わり、大型テレビスクリーンがパッとスタート地区に切り替わった。

数少ない日本人から歓声があがる。トップスタートの山口大助が大きく映る。

大型スクリーンでは次々と選手らがスタートしていく。選手らはそこから約10分強、ラッパーズビルの街中をスプリントし、大勢の観客が待ち構えているホッケースタジアム内のゴールへ向かう。そこで、まるでロックスターのようにステージであるリンクに登場し、最終ポストを取り大歓声の中ゴールしていくのだ。



しかし、ひととき大きな歓声は、スイス人らのヒロイン、シモーネのためにとってあった。彼女が優勝を決めるタイムで飛び込んできた瞬間会場は揺れ、この世界選手権の成功が約束された。

スイス女子のエース、シモーネ・ルーダー。間違いなく、今回の世界選手権の大スター。

イベントセンターのラッパーズビルに着いたときから地元スイスの期待が分かった。シモーネ。シモーネ。シモーネ。町中にシモーネが宣伝されていた。メディアセンターに行くと、シモーネを特集した新聞記事が壁に貼り付けられている。ホテルでふと着けたテレビでもシモーネが。

「大分前からメディアに対して働きかけてきたのだけど、ここ2年ぐらしかしら、シモーネが世界の舞台で活躍し始めてから。マスコミのほうから、世界選手権についてもっと教えてくれ、取材したいと大忙しになっていったの」

選手団に毎日注文をつけられ疲れた顔

をした事務局長のマリアンが教えてくれた。

開会式のホッケースタジアムを満員にする。オリエンティアでなくとも、見に来てくれる。マリアンたち運営者の願いは、そんなシモーネらスイスチームへの期待もあり、達せられた。

シモーネの活躍はスプリントの一日に留まらなかった。その次の日のロングを2位の Karolina Arewang Höjsg に3分差を付けて優勝。一日空けた次の日にはミドルを17秒の燐差で Hanne Staff に勝ち優勝。最終日のリレーはアンカーで2位のスウェーデンを引き離す快走で優勝。4種目で4つの金メダルを獲得するという離れ業を成し遂げた。もちろん、ミドル、ロング、それぞれの予選もトップで6レース負けなしであった。

活躍したのはシモーネだけではない。スイスはそのほか3つのメダルを獲得した。スプリントで銀。男子のロングではベテランの Thomas Bührer が金。女子のロングでも今回で引退を表明して

いる Brigitte Wolf が銅。そのほか入賞も多数あった。もともとスイス、とくに女子は強いとの前評判であったが、ここまで活躍するとは本人たちも思っていなかったであろう。

地元の大活躍にマスコミが大きく反応したのは言うまでもない。決してそれはオリエンテーリングがスイスにおいてメジャースポーツであるからという理由ではない。スイスチームの活躍があったからこそ、マスコミも一般紙のスポーツ第一面で扱うほど大きく取り上げているのである。

今回の日本チームは力を発揮したが、思ったより世界は厳しかったというところだろうか。

ミドル、ロング、男女ともに決勝にはあと少しのところまで進めなかった。リレーにおいても、いい走りはしたが、結果は期待したほどではなかった。テレインが走れるため、タイム差以上に順位が厳しかったということもある。しかし、2005年に向けて現状の強化方針では限界があるといわざるを得ない結果だった。

それはもちろん2005年でリレーにおける入賞が全く無理だということではない。ただいまの延長では辿りつかないということだ。

そのためには選手達の更なる努力とともに、彼らをサポートする、応援する力も必須であることは疑いない。

(山本英勝 hidi_o@yahoo.co.jp)

